ボートとボート部まみれの４年間

５７期　岡田華奈

はじめまして。57 期の岡田華奈と申します。

今回は、卒業して１年目の若造にお声をかけて下さりありがとうございます。先輩方のような立派なものは書けないですが、私なりに伝わるよう書かせていただきます。

簡単な自己紹介をさせていただきます。

期は 57 期にあたり、2022 年卒業の代で、現役当時は主務をしていました。今は就職の関係で神戸にいます。もし、これをお読みになってくださった OBOG の方で関西にお住みの方がいらっしゃったら、ぜひお会いして、いろんなお話をお聞きしたいです！

では、長くなってしまったので本編に入らせていただきます。

■漕手としてのプライド

以前、桑原元コーチから“漕手としてやっていくことに価値を感じている”と言われたことがありました。これを言われて最初はピンと来ていなかったのですが、思い返してみると、そう感じていた瞬間がありました。

私が**“漕手としてやっていくことの価値“**を感じた瞬間について、いくつかお話ししていきます。

1つ目は、私が1年生5月くらいに初めてエルゴで1000m TTを同期全員で測ったときのことです。

私は女子の同期の中で1 番遅く、すごく悔しかったのを覚えています。

このとき、悔しかったのと同時に、153cmで小柄な体格で筋肉がつきづらい私の体は、漕手に向いていないのではないかと、諦めたくなりました。

けれど負けず嫌いの私は、何か一つでも、と体格をカバーできるような技術や知識を身につけようとその日から、たくさんボートについて調べて、その日の練習での気づきや次の練習でやってみたいことなどをノートに書いて記録に残しはじめました。(このことはしばらく同期には黙っていたし、これを読んで知る人もいると思います笑)

もちろんすぐにはうまくいかなかったですが、この時に得た知識や練習の記録は何よりも成長につながったと強く感じ、さらにはそこに楽しさも覚えていました。

この経験からは、**“得た知識はそのまま自分の知識に活かすことができ、1回1回の練習の記録とその分析が1つ残さず自分の糧になる“**ということに気づけた瞬間が、私が漕手としてやっていくことに価値を感じた瞬間です。

これは余談ですが、負けず嫌いの私は、この頃、練習の時に同じ時間くらいにで出艇した1xの男子部員と同じペースで周回をしていました。笑

普通に漕いでいたら追い越されるので、レストを短くしたり、メニューの強度を上げたりして必死に同じ周回をしていました。今考えるとなかなかアホなことしてますね。笑

…本題に戻ります。

2つ目の瞬間は怪我によって乗艇できなくなったことです。

（この怪我は、ボート部の冬旅行で私が運動音痴すぎて引き起こした怪我なんですが…）

これによって、私は乗艇できなくなったのですが、練習に行かないのはボートを忘れてしまう気がして、練習には行ってバンチャをずっとしていました。

正直最初は、自分で練習に来ようと思って来たはいいものの退屈でした。

でも、続けていくうちに部員の漕ぎの癖を分析したり、人の漕ぎを見ることで自分の漕ぎの武器や、持っていないものを見つけたりと有意義な時間を過ごすことができました。1つ目の瞬間の話の時にも出てきたのですが、今まで自分の漕ぎは分析をすることがあっても、人の漕ぎをまじまじと見ることが今までなかったので、今振り返るとすごくいい経験になりました。

今まで分析で見ていたビデオだって、バンチャの人が撮ってくれていたし、練習の準備だって限られた時間の中でも、手伝ってくれることで、より多くの時間を練習に割くことができていました。

この経験によって、何よりも**“サポートがあるからこその漕手としての成長がある“**という気づきが、私が漕手としてやっていくことに価値を感じました。

まだまだありますが、漕手時代の話が長くなってしまうのでこのへんにしておきます。

漕手時代のと言ったのには訳があって、実はこの後私にはCOX時代が存在します。

ここまで“漕手としてやっていくことへの価値“についてお話ししましたが、この価値を感じている人がなぜCOXをメインにやっていくことになったのか、どんな思いでCOXをやっていたのかを少しお話しさせていただきます。

COXに初めて挑戦したのは、確か1年生の冬の相模湖だったと思います。その時は、信じられないほどグダグダで、COXなんてもう二度とやりたくないと思うほどの出来でした。

そんな私がCOXに興味を持ったのは、2年生のときでした。

OBさんと乗艇するタイミングがあり、53期の多田開史先輩がCOXの艇に乗ったときに、COXでこんなにも艇の雰囲気が変わって乗艇の時の意識が変わるのかとすごく感動しました。

そして、こんなCOXになりたいと強く思ったのを鮮明に覚えています。

しかし、まだ漕手として大会を控えていた私はCOXに挑戦するタイミングはなく、ただ座学として知識を少しずつ蓄える日々でした。

そんな私に図らずも転機が訪れました。それは、コロナです。

コロナが流行り出して活動休止となった初年度は、私は3年生の代で、予定していた大会が軒並み潰れて、とてもとても悔しい思いをしました。

しかし、今考えると私にとってはいい転機だったのかもしれません。

実は、コロナが明けて活動が再開した時には、体力も衰え、漕手としてのモチベーションも落ちていました。けれど、自分たちの代の年だったため練習には顔を出さなければという責任感と、後輩たちには限られた練習環境の中でもめげずに成長してほしいという思いがあり、大したモチベーションもないまま練習には参加していました。

そんな中、同期の COX もコロナ予見で練習になかなか参加できず、COX の枠が空いていたため、積極的に名乗り出ることが多くなり、気づけば COX としての練習がほとんどでした。

これが、コロナによる私の転機です。

この時の私は、漕手時代に蓄えた知識をやっと活かせると少しワクワクしていました。

とは言え、コロナ明けの初 COX は、実は人生で 2 年ぶりの 3 回目とかの COX で少しビクビクしていたのですが、乗艇した後に同期に褒めてもらったおかげで自信がつきました。(私は褒めて伸びる単純なタイプなので笑)

ここからは、練習で同期や後輩の COX はもちろんのこと、先輩たちの 4+の COX をしたり、COX として大会に出させてもらったりもしました。

次第に、もっとこうしたいとか、こういうことができるようになりたいなど、さまざまなモチベーションが生まれてきました。

今まで漕手として価値をすごく感じていましたが、COX としてのボート部人生もすごく価値を感じることができました。

私が 53 期の多田開史先輩の COX に惹かれたみたいに、私の COX に惹かれてくれて COX に興味を持ってくれる人がいればいいなという思いと、COX としてクルーの持っている力を最大限引き出したいという思いがただひたすらに積もっていく日々でした。

このようにして、コロナという、綺麗なきっかけではないものの、漕手としての価値を感じていた私に COX を挑戦する機会を与えてくれて、COX を始めることになりました。そうして始めた COX は、私のボート部人生において大事な時間になりました。

■主務としての2年間*

実は、いろいろあって主務を2年間やっていました。

2年目は大したことはできてはないんですが、主務としての経験も私を成長させてくれました。

これは私の持論ですが、主将はチームを引っ張っていく存在で、主務はチームの活動を円滑に進める裏方だと思っています。

要するに裏方だから目立たないんです。笑

目立ちたくて主務をやっていたわけではないので、それ自体が苦だと思ったことはないんですが、ボート部が男社会ということもあって、女の私が主務をやっていることで正直いろいろな思いがあったのではないかと勝手に思っていて、それが苦だった時が1年目の時にありました。

勝手に私が思っているだけなので、被害妄想だったら非常に申し訳ないのですが、現役時代に私が感じていたことを少しだけこの場を借りてお話ししたいと思います。

女子ということで、当たり前ですが男子よりはエルゴのタイムも艇速も遅いです。正直言って、そんなことは主務という仕事をやる上で何の関係もないのですが、これと主務という裏方の立場のせいで、悪い言い方をすると“舐められているな“と感じることが何度かありました。

それがすごく悔しくて、練習の負荷を上げたり、練習の参加率も無理に上げたりしていたりしました。

今思えば、そんなことやっても何も変わらないんですけどね。笑

もちろんその当時も、そんなことをやっても何も変わらずでした。

そんな時、57期内でゴタゴタがあり言いたいことを言えず、モヤモヤしているときに56期の主務の宮本先輩に相談したことがありました。(本人は覚えているか知りませんが。笑)

その時に、“言いたいならそれでいいと思う“って言ってくれたのがシンプルな言葉だけどすごく刺さって、今までのことは伝えられなくても、その時その時で思ったことを伝えないと状況は何も変わらないなと感じさせてくれました。

伝えた以降、風向きが変わったかどうかは正直わからないけれど、気持ちがすごく楽になったのを覚えています。

そこからは、私にしかできない主務をやろうと思っていました。

この主務での経験は、どこに行っても、どんな役割になっても、周りがどう思っていようと、“私にしかできないことを見つけてやろう“と思わせてくれるようになりました。もしかしたら、こういう思いがあるから今思えば2年目の主務もすんなり受け入れたのかもしれません笑

■学連との出会い

学連というのは、**関東漕艇学生連盟**という戸田の各大学が有志で集まって大会運営やコースの整備をしている団体のことです。

たまたま勧誘を受けた私は、外の世界を見てみたいという好奇心半分と、中大理工は外の世界と関わりがないので知っている人が誰もいないという点の不安が半分でしたが、思い切って足を踏み入れてみました。

最初は、感じていた不安の通り、誰も知っている人がいなくて居心地が少し悪かったというのが正直な思いです。ただ、3 年生のときのインカレ・全日本で初めて学連として大会を乗り越えてからは、1 人の仲間として学連に入れた気がして、私の居場所の 1 つとなるくらい居心地のよい場所へと変わりました。

朝の集合時間も早いし、私は水路だったこともあり体力の消耗も激しいし、楽しいことばかりではなかったですが、それでも学連の人たちと過ごす時間が楽しくて続けて来ました。

学連はいろいろな大学の人が集まっているので、境遇も様々ですが、ボートをやっているというただ 1 つの共通点があるだけで、打ち解けられるし、違う境遇だからこそ、もっと話してみたいという気持ちが高まるような唯一無二の場所でした。

何よりも有志で集まっているからなのか、自分から動ける人も多いし、仕事をする上でもとても刺激になる場所でした。

さらには、関西の学連とも交流ができました。

関東と関西の学連 10 人くらいで、学連卒業旅行ができるほど仲良くもなり、社会人になった今でも、たまに会うくらいの仲にまでなり、正直驚いています。笑

もちろん関東勢も、引退した今でも日程が合いさえすれば、会っていろんな話をする仲で、あのとき学連に入る決意をして本当によかったなと思っています。

普通に過ごしていれば、ここまでさまざまな大学の人と出会うこともなかったけれど、ボートをしていることでここまでたくさんの人に出会えて、それが今でもつながっていることが幸せだし、不思議なことだなぁと心から思います。

もし、これを読んでいる現役生や新入生の中で学連に興味を持った人がいれば私まで連絡ください笑

■さいごに

話そうと思えばまだまだ話せますが、思ったより長くなってしまった気がするので、この辺で終わらせようと思います。

季刊誌を書いてみないかとお話を持ちかけてくださった、下遠野さん、中島監督、桑原元コーチ、このような機会を与えてくださってありがとうございました。

また、これを読んでくださってくれているOBの方々、現役のみなさん、こんな若造の拙い長話に目を通してくださってありがとうございます。

もし、今後お会いすることがあれば季刊誌読んだよと声かけてくださるととても喜びます。笑

時間さえあれば顔を出す予定なので、OBの方々、現役のみなさん、ぜひいろんなお話が出来ればと思います。よろしくお願いいたします。

57期　岡田 華奈

以上